

第6回 兵庫県立神出学園・兵庫県立山の学校の機能充実に向けたあり方検討委員会 議事録

1 日 時 令和8年8月28日（金）14:00～15:30

2 場 所 農業共済会館 4階 第1会議室

3 出席者

新井肇委員長、秋光恵子委員、喜多和美委員、辻登志雄委員、中尾志都委員、
西田勉委員、前阪一彰委員、三谷治委員、吉田利徳委員、水川男女青少年課長、
中島同副課長 他

4 内 容

(1) 開会

(2) 議事

ア 会議の運営について

- ・委員会の会議は、個人情報に関する事項等を除き原則として公開することを決定
- ・2名傍聴される旨の報告

イ 今後の議論の方向性（案）について

- | | | |
|----------|---|-----------|
| (ア) 概要説明 | } | 内容は以下のとおり |
| (イ) 意見交換 | | |

(3) 閉会

【議事要旨】

(事務局)

（資料について説明）

(委員)

事務局より説明があったとおり、資料前半の4ページまでに委員会の構成・検討経緯・施設の現状と課題、後半の5～9ページに統合に向けた基本的な考え方、新たな拠点施設の具体的なあり方、まとめが整理されている。

つきましては、まず、前半の4ページまでについて、確認すべき点、質問、あるいはご意見をいただきたい。その後、後半部分について同様に質問、ご意見をいただきたい。

(委員)

4ページ目の「(3)主な課題」の①施設の役割の変化について、設置当初における神出学園・山の学校それぞれの役割が記載されており、現在では「両施設の役割の違いは無くなってきている」点が赤字で示されている。

「(2)検討の背景」にも記載されているとおり、通信制高校へ進学したとしても、その

後の生活や社会的自立に十分につながらないケースが見られることなどを踏まえ、神出学園の設置から一定の年数が経過し、当初想定されていた役割と現在求められている役割が変化している。したがって、現代的な課題に即した施設のあり方が必要であることを付け加えてほしい。

（委員）

役割の違いがなくなっているから統合する、ということだけではなく、新たに顕在化している課題への対応が必要という点を踏まえるべきである。特に、通信制課程を卒業した後、約3割が進学も就職もしていないという現状があり、社会的自立に向けた支援の場として、施設の機能を一層強化していく必要があるとの意見かと思う。

（委員）

4 ページ目の「(3)主な課題」について、入学者の減少と財政負担の項目が非常に大きく強調されているように見受けられる。今後、統合後の評価を行う際に、この2点が主要な課題として残ると、統合による利用者数や1人当たりのコスト削減といった数値指標が中心となる危険性がある。

青少年支援施設である以上、生活リズム、自己肯定感、対人関係、家族関係、学習の再開、修学・進学支援など、支援によってどのような変化が生じているのかを把握できる指標の設定が必要ではないか。

（委員）

不登校経験者が両施設とも似たような状況になってきており、統合は財政面の苦しさだけで捉えるべきではなく、より積極的な意味づけが必要である。ひきこもりが146万人という状況の中で、不登校経験者が社会的自立に向かっていくことが可能となる施設づくりを進めるという観点を、課題整理の中に記載すべきである。

社会的自立に向けて、自己肯定感の向上、生活リズムの改善、社会性やコミュニケーション力の獲得など、これまで以上に身につけられるような支援を行うことが課題であるとし、こうした支援によってどのような変化が生じているのかを成果指標として設定する必要があるとの意見かと思う。

（委員）

4 ページ目の右上の課題と左下の課題の示し方が読み取りにくい。「(2)検討の背景」では、社会が子どもたちを十分に受け止められていない状況が課題として示されており、その課題に対応する施設のあり方を、「(3)主な課題」に記載すべきではないか。資料の構成としても、(3)の課題の意図は、子どもたちが社会性を育むための施設を目指しているということではないか。

（委員）

前半についてはここまでにして、後半5ページ以降について、委員の皆様から忌憚のな

いご意見をいただきたい。

(委員)

7ページ目の表について、これまで委員会で十分に協議されてきた内容であると理解しているが、①入学対象者の「実施にあたっての留意事項」の書きぶりが気になった。捉え方によっては、小・中学生の体験利用を将来の入学につなげることを意図しているようにも受け取られ、入学者の増加を目的としているかのように見える点が懸念される。

小・中学生においても不登校や引きこもりは大きな課題であり、体験利用は将来の入学につなげるためではなく、社会との接点を持ち、早期支援や予防的支援を行うためのものであると思う。この観点が資料に十分反映されていない印象があり、小・中学生への支援の位置付けを明確に組み込む必要があるのではないかと。

(委員)

①入学対象者の欄について、年齢や狙いが示され、留意事項として異年齢交流や小・中学生の体験利用の拡充が記載されているが、捉え方によっては、体験利用を将来の入学につなげる意図があるようにも受け取られかねないとの指摘かと思うがどうだろうか。

(委員)

神出学園については、早い時期から子どもたちに親しんでもらい、必要になった際には利用につながることも一つの意義である。小・中学生の受け入れは、夏休みや金曜日など学園生が不在の時間帯を活用した一時的な体験であり、長期間滞在するイメージではない。

現在も体験利用は実施されており、子どもたちが「こうした世界もある」と知る機会として位置付けられていると思っている。

(委員)

神出学園の運営協議会では、小・中学生の受け入れを求める意見が出されており、神出学園を居場所の一つとして利用してもらうことは有意義である。体験利用は、施設を知ってもらう機会としても一定の意味がある。

一方で、資料の書き方によっては、体験利用が将来の入学者確保を目的としているように捉えられる可能性があり、いわゆる「青田買い」のような誤解を与えないようにする必要がある。

(委員)

施設の理解を深める、小・中学生が早い段階で神出学園の存在を知ることには意義があるとの意見が出た。一方で、資料の書き方によっては、体験利用が将来の入学につながることを目的としているように受け取られかねず、入学対象者の確保を意図したものと誤解される可能性があるとの懸念があるというご意見かと思う。

(委員)

資料に「入学につながる」と記載されていることにより、施設側が入学者の確保を目的として体験利用を促しているかのように受け取られかねない。そもそも資料の「入学対象者」は、小・中学生など入学年齢に達していない者も含め、施設の体験利用を通じて場を知ってもらうという意味合いがある。入学者数の確保を意図したものではなく、入学対象年齢に達していない子どもたちにも、施設を利用してもらうことを促す趣旨である。

入学対象年齢前の子どもたちに対しても、施設を利用できるという表現に改めることが望ましい。

(委員)

体験利用の位置づけを、早期入学を前提としたものではなく、神出学園を広く知ってもらうための機会として示す必要がある。資料の「入学対象者」の表現は、小・中学生など入学年齢に達していない者も含め、利用可能な層を広く示す意図があるため、「利用対象者」や「利用可能な方々」などを追記することで趣旨が明確になるのではないかと。

また、「入学につながる体験入園の実施」と「異年齢交流や小・中学生との体験学習機会」の2点に整理することで、早期の囲い込みや入学促進の印象を避けられ、入学に直結するイメージを与えない記載となるのではないかと。

(委員)

資料に「入学対象者」および「利用対象者」と記載する。そして、異年齢交流、小・中学生の体験機会の拡充というところと、入学する前に試行的に来てみるということを分けて記載するというご意見かと思う。

(委員)

在籍期間について、中学1年から3年、高校1年から3年の学年差を踏まえると、3年目は先輩・後輩の差が大きくなり、望ましい状況ではないという声があったが、一方で、保護者からは「ここで元気になるので在籍を続けたい」との要望もあり、在籍継続を希望する声も存在する。在籍が3年目に及ぶことでプログラムがマンネリ化し、子どもが慣れすぎる可能性も懸念されるが、在籍期間の扱いについて改めて議論すべきではないかと。

(委員)

先日の神出学園運営協議会で、保護者代表から「3年目もあればいい」、学園生からも「3年目も在籍したい」といった声があるとの発言があった。以前から、2年の在籍期間終了後に「もう1年いたい」と希望する生徒も存在している。保護者は、神出学園に入ることによって子どもが元気になった、話をするようになった、休みに出かけるようになったなどの変化を感じており、2年だけでなく、さらに在籍を続けたいという声を聞く。

3年目の利用については、学園内でも検討が行われており、もし3年目を設けるのであれば、1・2年目は寮生活、3年目は通学で週に数回活動する形が考えられるとの意見が過去にも出ていた。長期在籍がモラトリアム化し、学園が子どもの世界の全てになってし

もう懸念もあり、次のステップに進むための基盤を整える施設としての役割を踏まえると、原則2年が妥当ではないか。

ただし、3年目を「在籍」とせずとも、月納金を納めてもらい、通学型の支援やフォローアップの頻度を上げる形で、より手厚い支援を行う方法もあり得るのでは、と個人的には思うところもある。

（委員）

入所期間の短縮や延長などの柔軟な対応の必要性は、今回の変更点の中でも特に重要と感じている。不登校からの回復期間は子どもによって大きく異なり、半年で社会に出られる子もいれば、2年と少しでようやく回復が見えてくる子もいるなど幅がある。半年で卒業できると見込まれる子にはそれに見合ったカリキュラムを、2年間を終える段階で「あと半年のフォローがあれば社会復帰できる」という状態の子どもに対しては一定期間延長して支援できる体制が望ましい。

延長の形は、2か月、3か月など短期間の延長を柔軟に設定できることが重要で、回復のスピードに応じたステップを設けることが適切であると考え。カリキュラムを年次で固定するのではなく、子どもごとの課題に合わせて進めることが必要である。

また、親としては、社会に馴染めるような成長ができれば原則2年の入所期間に限らず、出来るだけ早く学校や社会に戻って欲しいと考えるケースもあれば、逆に2年で回復しきれず不安を抱えたまま終わるケースもあると考える。子どもに合った柔軟な支援期間を設定できることが、安心して預けられる環境につながると考える。

（委員）

前回の神出学園の運営協議会において、子どもの状況に応じた複数のモデルケースを示し、カリキュラムという形ではなくとも、目指す姿や進路のイメージを子ども自身が意識できるようにする方法が有効であるとの意見があった。こうした考え方は、今後取り入れたいと感じている。

今回、在籍期間は原則2年とされているが、2年に満たない場合の扱いや、2年に加えてどの程度の延長を認めるのかといった細部は、今後整理が必要である。2年プラスアルファの部分をもどのように位置づけるかを明確にすることで、より適切な支援体系が構築されたいと考える。

（委員）

前回の神出学園の運営協議会において、健康な学園生ならば1年目で修了するなど、2年間で年次で区切るのではなく、子どもがその期間をどのように使い、支援側がどのような意識づけで関わるかを示す必要があるのではと提案した。多くが不登校経験者であり、入学当初は気力が落ちているため、まずは回復に重点を置き、元気が戻ってきた段階で、高校卒業を目指すのか、仕事を目指すのかなど、進む方向を探り、目標を定め、実践につなげていく流れが良いのではないかと考える。

こうした段階を示すことで、子ども自身が「今どの段階にいるのか」を把握しやすくな

り、同じプログラムでも体験の意味づけが変わるとされている。2年間を終えた後も、次のステップに向けた方針を持ち、フォローアップや地域へのつながりを見通せるようにすることが望ましい。

そのためには、事前にモデルケースを作成するだけでなく、学園生が現在どの段階にあるかを把握するアセスメントが必要であり、心理面だけでなく生活面・行動面など実質的な評価も求められる。2年プラスアルファの期間をどのように扱うか、2年未満の場合の扱いをどう整理するかなど、今後明確化していく必要がある。

（委員）

保護者から、神出学園に在籍しながら通信制高校に通っていた学園生が、学園の在籍期間が2年で終了したため、通信制高校の残り1年を継続できなくなったという事例を聞いた。これまで柔軟に「プラス1年」を検討してきた経緯も踏まえ、原則2年は妥当であり、5年・6年と長期化すべきではないものの、学業の継続など子どもの状況に応じて、必要に応じた1年程度の延長を柔軟に認める仕組みがあればよい。

（委員）

原則2年以内としつつ、留意事項にあるとおり、個々の状況や進路形成に応じて在籍期間を柔軟に運用できるようにするべきとの意見が示された。これまで短期での修了を想定していたが、実際には短縮だけでなく延長の必要性もあり得るため、プラス・マイナス双方を認める仕組みが望ましい。

例えば、1年で次の進路が明確になれば1年で修了してよいし、逆に3年目を通常の寮生活とは異なる形態で支援する方法も考えられる。また、社会的自立に向けて、自分が今どの段階にいるのかを把握できるよう、段階モデルやシラバス的な枠組みを提示することが有効であるとの提案があった。これは新施設の運用段階で具体化される内容になると考えられる。そういう意味合いを含ませつつ、原則2年であるということを資料で示すというまとめ方でよろしいか。

（委員）

9ページの「5 まとめ」上から4行目にある「一方で、更なる機能強化を図る観点からは、運営の効率化と持続可能な体制の構築が求められており、その一環として統合を進めることが適当である。」という文章について、やや違和感がある。捉え方によっては、財政的な効率化を目的として統合を進めるようにも受け取られかねず、教育分野においては効率化と教育的な価値の両立が難しいと考える。

実際に、所属団体でも20年ほど前に、効率化を図る意味合いで日本語学校、英語教室、中高生の塾を、教育という分野でひとまとめに統合して人員削減や効率化を図った事例があったが、結果として、すべて順番に廃止となった。「神出学園」と「山の学校」の統合も、本来は持続可能な体制の構築や新たな機能の創出を目指すものであるが、効率化に重点が置かれすぎることのないよう留意する必要があると感じている。

そのため、統合は効率化そのものを目的とするのではなく、両施設の資源や強みを集約

し、新たな支援機能の創出や機能強化につなげるための手段であることが伝わる表現の方が望ましいと感じた。効率化にやや重点が置かれた印象を受けたため、表現の工夫を検討していただきたい。

（委員）

基本的な方向性としては、両施設を存続させていくことが望ましいものの、財政面や行政運営上の制約がある中で、その実現が難しい状況にある。そのため、単なる統廃合や規模縮小ではなく、時代のニーズに応える新たな形を創出していくという視点を強調すべきである。統合に伴う効率化やコスト面での効果は一つの要素として考えられるものの、方向性としては、両施設が有する資源や強みを活かしながら、新たな価値や機能の創出に置くべきである。

（委員）

統合によって生じる社会的資源や成果を活用し、検討の背景にある課題の解決につなげていくことが重要である。資料に示されているとおり、約3割の生徒が進学や就職に至っておらず、通信制高校と併用しながらも卒業後の進路が明確でない状況が見られる。この課題に対しては、これまで実施してきた体験活動や、その延長線上にあるプログラムを通じた支援が有効である。また、今後は進学や就職に至らない背景にある本質的な課題をさらに掘り下げて分析することで、既存プログラムの充実につながり、統合の意義がより明確になる。また、前回の神出学園の運営協議会において、学園の近年の取組について説明を受けた。そのときは大きな議論には至らなかったが、神出学園では近年、投薬治療や服薬管理を必要とする学園生の割合が増加しており、こうした状況は、学園の支援体制において専門職の役割が一層重要になっている。専門職として心理カウンセラーを配置しているものの、ステップアップベースから乖離し、療養型の施設という側面を持つ可能性もある。

そのうえで、セーフティケアの機能を維持しつつ、学園生が次の段階へ進むためのステップアップベースのような施設になることを期待している。

（委員）

先ほどの4ページに戻るが、ここが重要なポイントである。通信制課程に限らず、高校卒業後に就職に至らない者や、ひきこもり状態にある者、また高校に進学せず同様の状態が継続している者を、いかに社会的自立につなげていくかが課題である。

高校生年代を主な支援対象としながらも、背景に応じて対象をもう少し幅広く捉えることが必要であり、統合の意義については、より前向きで積極的な視点を強調することが重要である、というご指摘をいただいたと受けとめている。

また、まとめについては、効率化を目的とした統合により新たな施設を創出すると受け取られる可能性があるため、統合による縮小の側面だけでなく、その中で1校となった施設をどのように活かし、社会的自立に向けた新たな支援の場として発展させていくのかという視点を示すことが重要である。併せて、山の学校と神出学園が持っている良さ、レガ

シーを活かしながら、さらなる機能強化を図るという積極的な方向性が伝わる表現とすることが望ましいというご指摘だと思う。

また、様々な課題を抱えている子どもたちが入所してくる可能性は当然あり得る。そうした中で、心理の専門性や医療の専門性、また家庭支援という観点では福祉の専門性を、どのように確保していくのかという課題もある。そのため、こうした専門性を持った人材や支援体制を拡充できるような方向性も視野に入れておいた方がよいのではないかとご指摘だと思う。

これまでは教育的な支援施設という意味合いが強かったが、今後はもう少しその幅が広がっていくのではないかと個人的には思っている。

(委員)

不登校支援の施設として新たな施設になることを考えると、不登校の原因をどのように解消するのか、また、その原因に基づいてどのような対応をしていくのかが必要である。不登校の原因については、教育的な部分だけでなく、福祉や医療の部分もあると考えられるが、一方で施設として医療的な活動を行うことには限界があり、福祉とつなぐことはできても、現時点ではその専門家が配置されているわけではない。

また、医師を常駐で配置することは難しいし、看護師を増員することも現在の活動内容にはそぐわない。そのため、カウンセラーやその他のスタッフが、福祉や医療などの外部機関との連携や調整を行う際に支援できる専門人材がいることが、現在検討されている施設機能の充実には必要ではないか。

現在、スクールソーシャルワーカーは配置していない。相談対応については、カウンセラーが行う場合もあれば、教員出身のスタッフが行う場合もあり、内容に応じて対応している。例えば、心理面や家庭面での不安が主な要因である場合にはカウンセラーが、生活面など基本的な部分に関する課題については教員出身のスタッフが対応している。

(委員)

家庭支援や関係機関とのつなぎ役という観点から考えると、常勤かどうかは別としても、スクールソーシャルワーカーを配置することは施設の趣旨に沿うものではないかと思う。

校医は配置しているとのことで、そのような立場の方が関わることで、一定程度その役割を果たせる面もあると思う。

(委員)

現在は、精神科医が関わっており、ケース会議を月に1回程度実施する体制となっている。その中で、専門的な知見から助言や指導を受けているほか、スタッフに対してもケースへの理解や対応方法について助言をいただいている。

(委員)

機能の再編、強化については、これまでも意見のあった福祉や医療の充実を図ってい

くことも必要ではないかと思う。

（委員）

今、委員長がまとめられた内容について、「5 まとめ」の二段落目の文章に関して、現在の記載では、「一方で、更なる機能強化を図る観点から、統合を進めることが適当である」となっているが、機能強化そのものが統合を意味するわけではないのではないか。

そのため、「運営の効率化や持続可能な体制の構築を図る観点から、その一環として統合を進めることが適当である」とした上で、「機能強化を図る観点から、教育・福祉の専門性を高めるなど支援体制の充実を図る」といった形で整理した方がよいのではないかと。

また、不登校については、必ずしも否定的に捉えるべきものではなく、子どもの状態が「学校に行かない」という形で表れているものと考えられる。そのため、不登校そのものを課題として捉えるのではなく、子どもたちが社会の中で生きていく上での居場所や支援のあり方を考えることが重要であり、不登校の子どもたちを一括して問題視するような表現にならないよう、記載のニュアンスには配慮してほしい。

（委員）

社会的自立という点は、今後も前面に押し出す目標として位置付けていくべきである。施設の目標も社会的自立に置かれており、不登校は指導の対象や問題行動ではないという視点で支援が進められている。

その上で、不登校の時期が本人にとって意味のあるものとなり、将来的な社会的自立につながるよう、この施設として何ができるのかを考えながら進めていくことが重要ではないか。

（委員）

「機能強化を図る観点から」という部分は、「運営の効率化」とは別のものとして整理し、神出学園と山の学校それぞれのレガシーを生かしたプログラムの作成につなげるような表現にしてもよいのではないかと。さらに、「運営の効率化」は「運営体制の最適化」などに言い換えることで、効率化の色合いを少し薄めてもよいのではないかと考える。

また、最後の機能の再編・強化に関する部分については、福祉やカウンセリング機能等の強化に加え、フォローアップの視点も盛り込んでまとめてはどうか。

（委員）

我々からこの場で伝えさせていただいたことについては、一定受け止めていただいたのかなと思っている。それともう1点、先ほども話に出ていた神出学園の運営会議では、保護者2名から利用料金を上げてよいという意見があった。もちろん2名の意見であり、それが全体的な傾向とは言えないと思うが、月額利用料についてはこれまでの検討会でも議論されていた事項ではある。

(委員)

利用料を上げる方向性については検討している。物価高の影響や、新しいプログラムを実施する場合には一定の利用者負担をお願いしなければならない財政状況であるため、数千円程度の引き上げを考えている。一方で、学園生一人ひとりの状況は異なり、数千円でも負担が大きい家庭もあることから、そのような子どもたちにどのような配慮を行うかが課題である。

また、利用料の見直しについては、まだ決まっていない段階で公表すると在校生や保護者に影響を与える可能性もあり、その点も踏まえて「効率化」という表現に留めている。

(委員)

やはり存続していくためには、ある程度は利用者にも負担していただくことが必要ではないかと思う。もちろん、少し負担してもらったからといって、どこまで状況が変わるのかという思いもあり、そんなに大きく変わるものではないかもしれない。ただ、今の月額利用料を見ると日額で1,000円程度であり、負担できる家庭には負担していただく形が必要ではないかと思う。先ほども意見があったが、所得によって利用料に差を設けるような仕組みは必要ではないか。ある程度ベースとなる利用料は上げた上で、所得に応じて減免や免除を行うという形も考えられると思う。

また、不登校や社会に出られない人が多数いる中で、約30名のために1億円近い公費が投入されていることを考えると、少しでも財政負担を減らすために、今後の検討が望ましい。

(委員)

具体的な数字を出す段階ではないが、利用者負担という視点も考えていく必要があるということと捉えた。

数値的なことに関連すると、定員については資料では示さないのか。

(委員)

定員については現在、神出学園管理規則では80名となっている。規則の変更は未定だが、例えば部屋をゆったり配置したり、一人部屋を設けたりすることになれば、実際に寮で受け入れられる人数は今より減る可能性がある。その場合、実際の入寮者数は80名ではなく、60名程度になることも考えられる。

そうなった場合に通学生をどう考えるのかという課題も出てくるが、通学生についても利用者数として含めることで、入寮生と通学生を合わせた形で定員を考えていくことになるのではないかと考えている。

(委員)

80名というのは通学生も含めた定員か。

(委員)

今の想定ではそのとおりである。

(委員)

前半部分の話になるが、「3 統合に向けた基本的な考え方」の「(3)新たな拠点施設に求められる役割(委員会意見)」に記載の内容が、もう少しまとめの部分にも反映されるとよいのではないかと。現在のまとめは、どうしても効率化というところにかかなり重きが置かれているように感じるため、それが必要ではあるが、それだけではなく、社会的自立に向けた支援であることや、専門職による個別支援と共同生活・体験活動を組み合わせた支援を行うことなども、まとめの中にもう少し書き加えていただけるとよいのではないかとと思う。

(委員)

様々なご意見をいただいているので、再度見直したい。

(委員)

確かに効率化というところは少し気になる。例えば5ページであれば、「運営効率化」や「機能強化」など、さまざまな表現の仕方があると思う。効率化という言葉自体は何度か出てくるので、効率化を使うべきところと、別の表現を使うところを整理してもよいのではないかと。

例えば、4ページの財政負担が大きくなってきているという部分については、「効率化」という表現はそのまま使えるのではないかと。一方で、5ページについては、「運営体制の強化」などの表現にしておけば、その中に効率化の視点も含まれていると受け取ることができるように思う。

また、9ページの「5 まとめ」の部分についても、二段落目の「一方で、更なる機能強化を図る観点からは、運営の効率化と持続可能な体制の構築が求められており」という記載については、「運営の効率化」ではなく「運営体制の強化」といった表現もあり得るのではないかと。効率化そのものを否定するわけではないが、機能強化とのつながりを考えると、そのような表現の方がより適切なのではないかと感じている。

(委員)

今の神出学園がどのような状況にあるのか、また、山の学校との統合について、スタッフがどのように感じているのかも含めて、お話しさせていただきたい。

今後、さらに現代的・密接な対応ができるような施設にしていこうという必要性は、スタッフ全員が感じている。その中、プログラム、施設、食事等全てを充実させるには、やはりお金が必要だということは様々な場面で感じている。

例えば、給食についても、もう少し充実したものになりたいので予算を増やしてほしいという声が現場から出ることもある。しかし、そこには様々な事情や制約もあり、現状の中で工夫しながら何とか頑張っている状況である。

物価高の影響もある中で、どこかで何らかの形で見直しを行い、財源を確保していくことも必要なのではないかとというのが、今の私の率直な感覚である。

近年、神出学園には非常に多様な子どもたちが入学してくるようになったと感じている。以前は表に出ていなかったかもしれないが、比較的小となしく、落ち込みなどをきっかけに不登校になった子どもが多いように思う。そのような子どもたちに対しては、心理面と生活面の両方から支えていくというのがこれまでの基本的なスタイルだった。一方で、現在は心理面について診断名がつくケースも多くなっており、医療的な視点が関わる場面も増えている。そのため、全てではないものの、一定程度はそうした状況に対応することも求められている。

また、「神出学園は医療施設なのか」「福祉施設なのか」と聞かれることもあるが、私たちは「神出学園は青少年育成の施設である」と説明している。

その上で、神出学園の役割は、若者の心理面や生活面の両方を支えながら、次のステップにつながる状態まで回復を支援していくことにあると考えている。表現が適切かどうか分からないが、例えばマイナスの状態から少しでも前に進み、まずはゼロの地点まで戻ることができればよい。その上で、学校に行く、仕事をする、アルバイトをするなど、それぞれが自分のやりたいことに向かって進んでいける状態につなげていくことが、青少年育成施設である神出学園の役割だと考えている。

端的に言うと、福祉や医療という言葉を前面に出し過ぎると、外からは神出学園そのものが福祉施設や医療施設であるかのように受け取られる可能性があると思う。そのように受け止められると、福祉施設であれば福祉職員をもっと配置すべきではないか、医療的な機能を強化するのであれば医師や看護師をもっと配置すべきではないかという声も出てくる。

今後はより様々な課題を抱えた子どもたちが増えていくことも想定されるため、その現状や、神出学園が青少年育成施設であるという基本的な位置付けも踏まえながら、表現や書き方を工夫していただければと思う。

(委員)

後半部分については以上の意見でよろしいか。

また、今日が委員会の最終回となることから、この資料以外の部分も含めて意見があればお願いしたい。先ほど、神出学園の現状やこれからの方向性について、実際に携わっている立場から意見が出されたが、ある意味、山の学校は統合され、施設としては神出学園へ移ることになる。そのような中で、山の学校をどのように捉えていけばよいのかという点について、ご意見があればお願いしたい。

(委員)

山の学校の職員 OB や宍粟市長からは、山の学校は青少年の育成施設であり、支援施設ではないという意見が示されている。支援というに伴走型のイメージがあるが、山の学校はあくまで育成を目的としており、生徒を引っ張っていくような特徴を持つ施設である。そのため、統合にあたっては、山の学校の『育成力』と神出学園の『伴走力』という両施設

の強みを掛け合わせ、確かな相乗効果を生み出すという点は大切な視点ではないかと思う。

(委員)

他に全体を通しての意見はあるか。

(委員)

神出学園の学園生が最終的に社会へ飛び込んでいく段階では、山の学校のノウハウや指導の特色が非常に大事なのではないかと思う。

先ほど育成施設と支援施設では目的が違うため難しい面もあるとの話があったが、山の学校で実施されてきた取り組みを、ぜひ神出学園の支援にしっかり組み込んでいただきたい。

(委員)

今のことにに関して言うと、私は生徒指導が専門であるが、令和4年12月に『生徒指導提要』が改訂された。「させる生徒指導」から「支える生徒指導」へと軸足が移っており、教員主導のさせる生徒指導から、児童・生徒が主語の成長発達を支える生徒指導へと変化してきている。

ただし、支える生徒指導になったからといって、指導がなくなるわけではない。必要に応じて指導や援助を行うものである。したがって、生徒指導とは、指導であり、危機に陥った子どもに対する援助であり、そして全ての児童生徒の成長発達を支える教育活動である。

そのため、それらを総称して「支援」と呼ぼうという流れがあり、生徒指導部を生徒支援部という名称に変更しているところもある。また、大阪の府立高校のなかにはウェルビーイング部という名称に変えた例もある。しかし、それは指導がなくなるということではなく、指導、援助、成長発達を支えるという三つの営みを総称した形で支援と呼んでいる。

私は、新たな施設もそういうものであると考えている。当然そこには必要に応じた指導もあり、それは神出学園もこれまで行ってきたことであると思う。その軸足の置き方がどちらに強くあったかという違いはあるが、問題行動、反社会的か非社会的か、外に出るか内に向かうかといった違いの中で進んできたものであり、現在は課題の同質性も強くなっているのではないかと感じている。

そうした中で、私は新たな施設を、指導、援助、成長発達を支えるという三つの要素を持った支援の場として受け止めている。総称すると、「社会的自立に向けた青少年育成施設」なのではないかと思いながら、ここまでの議論を受けとめてきた。

山の学校が持っている良さ、神出学園が培ってきたものについて、今後、場所が神出学園になることで、神出学園に軸足が移行していくようなイメージがあるかもしれないが、そうではない。両者の良いところを持ち合いながら、新たな施設を作っていくということを改めて確認する必要があると思う。

また、推定 146 万人とされるひきこもりの存在が非常に気になっている。そのうち 40 歳未満を見ると、18.1%が中学校時代の不登校をきっかけとしている。もちろん、ひきこもる権利があることは認めた上で、社会的自立に向けて何ができるのかが重要な課題である。不登校児童生徒支援というよりも、資料にもあるように、不登校経験者が社会的に自立していくために何ができるのかを考え、行動し、実行していく場として新たな施設を捉えていけるとよいと思う。

そこにはもちろん、統合による効率化もある。しかし、二施設を一施設に統合したことによりお金が浮くかどうかは分からないが、必要な部分についてはしっかりとお金をかけることも必要である。財政が厳しい状況にあることは理解しているが、削ることだけではなく、新たなものを作るために必要なところにはお金をかけるということが体制強化ではないか。

長い目で見れば、社会的に自立し、税金を納める若者が増えることが地域や社会にとってもプラスになると思う。そのため、社会的自立を支える機能を持った施設になってほしい。

また、名称については今後検討していくことになると思うが、その理念や役割が伝わる名称としてほしい。

さらに、様々な意見に加え、子どもや若者の声も聞きながら、困ったとき、あるいは困る前に「行ってみようかな」と思えるような施設になってもらいたい。

これから実際の運用につながっていく中で、ここで検討されたことはできるだけ反映していただきたい。事務局においては、財政部門との調整なども含めて大変な作業になると思うが、ぜひ目指す理念をしっかりと打ち出しながら、より良い施設づくりにつなげていただきたい。

最後に、私自身の意見も含めた総括であるが、効率化ももちろん必要である一方で、もっと目指すべきところは、子どもたちや若者の社会的自立に向けた新たな支援の場をつくることである。ここでいう支援には指導も含まれている。そのような場であるということが伝わるようなまとめにしていいただければと思う。

今後、最終的な資料作りを進めていくことになるが、本日いただいた皆様の意見を踏まえ、最終的な表現の整理や調整については、事務局と委員長である私に一任いただきたい。必要に応じて改めてご意見を伺うこともあると思うが、そのような方向で進めていきたい。

本日の議事は全て終了した。円滑な議事進行にご協力いただき感謝申し上げます。今回で 6 回目の検討会となり、ここまで本当に様々な立場から多くの意見をいただいた。統合によって新たな施設ができる一方で、これまであったものがなくなることへの痛みや悲しみもあると思う。しかし、それを超える新たな価値を持った施設になってほしい。その思いを県民の皆様にも理解していただけるような形で示し、具体的な施設づくりにつなげていくことを願っている。

最後に、皆様から多くの貴重なご意見をいただいたことに改めて感謝申し上げ、本日の議事を終了したい。時間が超過したことをお詫びするとともに、皆様に御礼申し上げます。長期間にわたりご協力いただき、ありがとうございました。事務局へ進行をお返すする。

(事務局)

本日は貴重なご意見を賜うことができた。昨年9月の第1回委員会から始まり、本日で第6回目となるが、新井委員長をはじめ、委員の皆様には毎回本当に熱心にご意見をいただき、改めて深く感謝申し上げます。

本日のご意見を踏まえ、最終的な取りまとめについては委員長と調整の上、公表させていただく予定である。これまで委員の皆様からいただいたご意見を踏まえ、県としては、神出学園と山の学校がこれまで培ってきたものを生かしながら、新たな拠点がより良いものとなるよう、着実に取組を進めていきたいと考えている。

今後とも、委員の皆様には引き続きお力添えをお願いしたい。また、本県の青少年施策の推進に対し、引き続きご理解とご協力を賜うようお願い申し上げます。簡単ではあるが、以上をもって挨拶とさせていただきます。

(終了)